

明治期の少年雑誌と読者たち

— 『少年園』『小国民』の書き入れをめぐって—

柿本 真代

仁愛大学人間生活学部

Reading Practices of Young Readers in the Meiji era : An analysis of Marginalia in Youths' Magazines

Mayo KAKIMOTO

Faculty of Human Life, Jin-ai University

本論文の目的は、少年雑誌に残された書き入れから、明治期の雑誌と青少年の読書の実態を検討することにある。明治期の少年・少女雑誌と読者については、これまで投稿欄の分析を中心に多くの研究が蓄積されてきたが、本稿では雑誌から読み取れる読書のあり方を相対化し、個々の読書実践についてより具体的に明らかにするべく、雑誌本体に残された書き入れを用いた。国文学研究資料館・東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫・大阪府立中央図書館国際児童文学館で調査を行った結果、感想や批評など、多様な読書反応の記録が浮かび上がった。

キーワード：少年雑誌、近代日本、書き入れ、読書研究

1 はじめに

明治期の子どもたちが何を読み、どのように考え、そして書いてきたのかについては、従来多くの研究がなされてきた。特に明治期には青少年向けの雑誌が作文修業の場として重要な意味を持ったこともあり、前田愛『近代読者の成立』（有精堂、1973）以来、雑誌の投稿文を分析した研究が数多く蓄積されている。

例えば、『穎才新誌』などの読者投稿からジェンダー規範の生成を明らかにした研究¹や、『少年世界』における投稿文の文体の変容に着目し、少年概念の内実の一端を明らかにした研究²、同じく『少年世界』がどのように入手され、どのような場で読まれていたかという読書様態を明らかにした研究³など、投稿文を用いた優れた研究が多様に展開されてきた。

しかし、実際の読者がこのような青少年向けの雑誌をどう読み、何を考えたかということについて投稿文を扱う際には注意が必要である。こうした雑誌に掲載

された投稿文は編集側の理想像に同調するようなものが中心に選ばれ、時に編集者による修正を加えた上で掲載される場合もあったからである。それだけでなく、明治後期の少女雑誌では、男性が少女になりすまして投稿した例もあり、雑誌の投稿欄はあくまで雑誌の表現の一部として捉えることの重要性が指摘されている⁴。

したがって、それぞれの読者の読書実践のあり方をより具体的に描き出すためには、雑誌に掲載された文章や挿絵から読み取れる情報のみではなく、読者や雑誌関係者の回想や日記など、別の資料を併せて参照することが不可欠である⁵。

本稿では雑誌がどのように読まれたかを考察するための資料として、雑誌本体に残された書き入れを用いる。近年様々な雑誌が復刻され、また史料保護の観点などから原資料を閲覧する機会は限定されている。しかし、復刻版は複数の原資料から現存状態の良い誌面

を選んで構成されるため、雑誌本体に残された読書の跡は、多くの場合そこでは捨象されることになる。

現在、書籍や雑誌への書き込みをすることは、図書館等の蔵書に対してはもちろん禁止されており、また自身の所蔵するものを対象としたものであっても、価値を下げるものとして忌避される傾向にある⁶。

しかし主に明治初期まで流通した和本では、校合や朱引き、注釈などの書き入れは後の読者の理解を助けるものとして価値あるものと考えられた⁷。こうした和本への書き入れから、その書物の理解の過程や当時の学習様態を明らかにする研究もなされている⁸。

また洋本についても、ルネサンス期を中心に、読者による書き入れが、初期の読者のテキストへの反応やテキストの向き合い方を解明する読書史の貴重な史料として位置づけられ、解釈などの書き入れのほか、下線を含む様々なマーキング部分の分析がすすめられている⁹。

本稿ではこれらの研究の手法を参照し、明治期を代表する少年雑誌『少年園』『小国民(のち少国民と改題)』に残された書き入れを収集・分析する。

雑誌が同時代性の強いメディアであることを踏まえ、和本やルネサンス期の書物の書き入れに見出されるような次の時代の読者へ読み継ぐという意識は、これらの史料からは期待できない。しかし、明治期の少年雑誌の場合には、回し読みが行われたり、地域ごとの読書会が組織されたりしていたことを考えると、同時代の自分以外の読者を意識した書き入れを発掘することも想定できる。

雑誌に見出される書き入れの種類は多種多様であり、特に少年雑誌は年少者が読んだものであるがゆえに、内容とはまったく関係のない落書きや手習いのようなものなども多く含まれる。一方で、数が多いとは言えないものの、署名や蔵書印などの持ち主の手がかりとなるようなものや、線引きや記号、誤字の修正、感想などの積極的な読書反応の記録も存在する。そして、これらの記録は個々の読者が雑誌にどう向き合い、どう読んだのかを編集というフィルターを介すことなくそのままの状態で作るものとして貴重である。ただ、こうした書き入れを用いた研究にはすでに指摘があるように、偶然性に頼らざるを得ず、出所が限られ

るという点に弱点がある¹⁰。

こうした弱点を踏まえ、可能な限り体系的に調査を行うことを目的に、原資料が複数保存されている国文学研究資料館・東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫・大阪府立中央図書館国際児童文学館(調査日順)の3館にて、所蔵される『少年園』『小国民(少国民)』のすべての冊子について調査を行った。

本稿の試みは、これらの雑誌の書き入れから読書の記録を復元することによって、少年雑誌をめぐる読書実態の一端を明らかにすることにある。

2 『少年園』はどう読まれたか

(1) 国文学研究資料館所蔵の『少年園』について

まず、国文学研究資料館所蔵の『少年園』についてみていきたい。国文学研究資料館ではまとまった分量の原資料が収蔵されているとともに、書き入れの有無についてもOPACで公開されている。

これらの雑誌の中で、書き入れの特徴や文字から、同一人物による書き入れと思われるのが、以下に紹介していく8巻86号(1892年5月18日)から8巻95号(1892年10月3日)にかけての書き入れである。

8巻86号には複数の記事に傍線や傍点が付されており、それ以降のものには文章での書き入れがなされている。まずは傍線や傍点が付された記事について考察していく。

(2) 傍線が付された記事

【史料 1-1】「松葉搔の童子」『少年園』8巻86号(1892年5月18日)



所蔵：国文学研究資料館

この記事は時事評論や海外事情を扱った「叢園」欄に掲載されたものである。星亨が衆議院議長になったということ、「名誉赫々、眞に羨むべし」として、星亨がかつては家が貧しく、さながら二宮金次郎の如く籠を背負い松葉をかき集めつつ暇があれば書を読んだということなどを伝え、「昔しの松葉搔童子、今の衆議院議長、勉むべきは読書なる哉、励むべきは読書なる哉」と学問による立身を説いたものであった。

タイトルには朱で傍線が、傍点は全文に付されている。同じく「叢園」欄の次の記事にも傍線・傍点が付されている。

【史料 1-2】「蠶児孵化」「北里医学士の名誉」『少年園』8 巻 86 号



所蔵：国文学研究資料館

「蠶児孵化」という記事の一部にも傍点がある。付されたのは、「宿繭満堂の雪を見るに至れば、総て是れ黄金なり」という部分である。この記事は農家の少年に養蠶の業が貴いものであること、そして蠶児育養の方法を研究すべきと伝えるものであった。

同じ頁の「北里医学士の名誉」という記事は、先の「松葉搔の童子」と同様に、題名に傍線、記事の一部分に傍点がある。傍点は「(ドイツでは一筆者注) 伯林大学名誉教授の栄位を氏に与えんことを皇帝陛下に奏上したりと云ふ。是れ独り氏の名誉のみにあらず、実に吾邦の名誉といふべし」という部分に付されている。

この読者がこれらの傍線や傍点をどのような基準で書き入れていたのか、正確に知ることは難しいが、博文館の少年雑誌編集者をつとめた竹貫佳水が記した

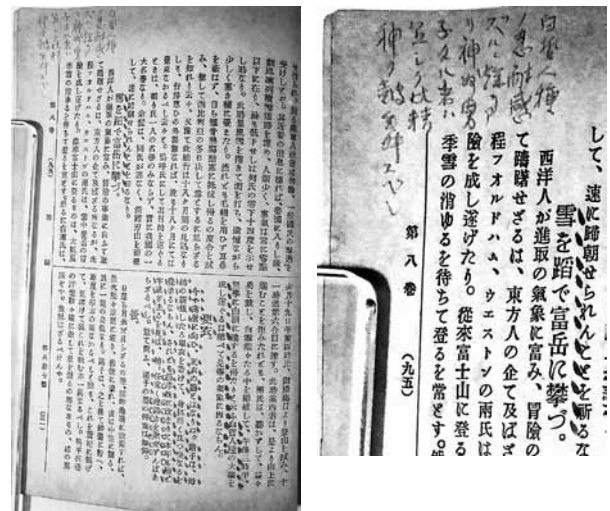
『読書法：少年百科叢書第 3 編』（博文館、1912）では、井上哲次郎の説を引用し、「先づ批評を加えたり線を引いたりして置きましたならば、それが幾らか抄録に代るのであります」と述べられている。

時代にはややずれがあるが、やはり線や点によって自分のため、あるいは後の読者に向けて要点を目立たせる効果をもたせたものだろう。

こうした傍線・傍点にとどまらず、批評を加えることもまたこの読者は実施している。節を改めてみていくこととする。

(3) 批評が書き入れられた記事

【史料 2】「雪を踏で富岳に攀ぶ」『少年園』8 巻 87 号 (1892 年 6 月 3 日)



所蔵：国文学研究資料館

この記事もまた「叢園」欄に掲載されたもので、「西洋人が進取の氣象に富み、冒険の事業に向ふて敢て躊躇せざるは東方人の企て及ばざる所」と始まり、「フオドルハム、ウエストーン」という 2 人の人物が雪の残る富士山の登頂に成功したという。ここで報じられているのは、登山家として著名なイギリス人宣教師ウォルター・ウェストーン (Walter Weston, 1861-1940) と、その友人で末松謙澄のケンブリッジ大学時代の学友フォードガム (Montague Edward Fordham, 1864-1948) の 2 人が 1892 年 5 月に行った富士登山のことだろう。

ウェストーンによると「まだ肩まで雪におおわれているフジに登るなどという考えは、かれら（日本人一筆

者注)にとっては不可能と同様、正気の沙汰ではないのであり、そのようなことをやろうとする気の狂ったイギリス人を見逃してはならぬ¹¹と注目を集めたようで、当時の新聞でも「毎年瑞西山中にて雪を踏んで山岳を攀づるの危険を冒し為めに一命を失ふものは英国人最も其多きに居ることは隠れなき事実なるが此富士山登りも矢張り同一の気象を顕はせしものと云ふべし」¹²「英人の身軽く旅行するは其慣習とは云へ氏の如きは亦一個の快男子とも云ふべし」¹³など、イギリス人の性質と絡めながら、驚きと称賛をもって報じられた。

書き入れについてみると、まず傍点は朱で題名と、末尾の「白哲人種の大業を成し遂ぐるは総べて是等の気象に因るならん」という箇所が付されている。

さらに、記事の左上には鉛筆で、「白哲人種ノ忍耐感ズルニ余リアリ神州男子タル者ハ宜シク此精神ヲ鼓舞スベシ」と書き入れがなされている¹⁴。この記事の本文では2人が案内人の制止を聞かず「益々勇を鼓し」たとされているのみである。したがってこの「忍耐」についてはこの書き入れを行った人物による解釈が加えられているのである。

『少年園』2巻14号(1889年5月18日)掲載の「日本人第一の欠点」という記事で、欧米人に比べて日本人が劣っているのは才智よりも何よりも「忍耐」であると論じられていたように、この時期の少年雑誌には身に付けるべき態度のひとつとして、「忍耐」という語句がしばしば用いられる。この書き入れも、そのような文脈を踏まえて書かれたものと考えられるが、この読者は「白哲人種」と「神州男子」を対比させ、我々日本男子も「此精神」、すなわち忍耐を鼓舞すべしと、記者の意図をくみ取り、その教訓性をより明確にするような評を書き入れている。

【史料3】「種樹」『少年園』8巻88号(1892年6月3日)



所蔵：国文学研究資料館

これは巻頭論説で、記念植樹についての記事である。もともになっているのは、『教育報知』310号(1892年4月13日)に掲載された第四高等中学校教授・大島多計比古の提案(「種樹日を設くるの議」)である。

大島は、第四高等中学校で種樹日を決め、毎年植樹をすることで、「衛生上に美観上に」効果があるだけでなく、在校生が卒業した後「繁茂成育したる樹木に對し当時師弟相愛し友僚相親みしことを回想し随て永く我校を思ふの情を惹き起す」ものとして有益だと提案した。

『少年園』ではこれに加えて茨城県下のある小学校でも桜の植樹が実施されており、成長して美観を誇っている例を紹介し、「職員諸子が、着眼の非凡にして、生徒諸子が、温順能く其命を奉じたる」ことを絶賛して、全国の学校でも毎年卒業生が出るたびに植樹をしてはどうかとすすめている。植樹をすれば記念にもなり、その樹を植えた人がどのような人物になったかを生徒に語ることで「郷の子弟をして啓発歡喜せしむる」という教育的効果もあると論じた。こうした「学校植栽」は、文部次官牧野信顕によって1895年ごろから小学校を対象に本格的に広められていく¹⁵。

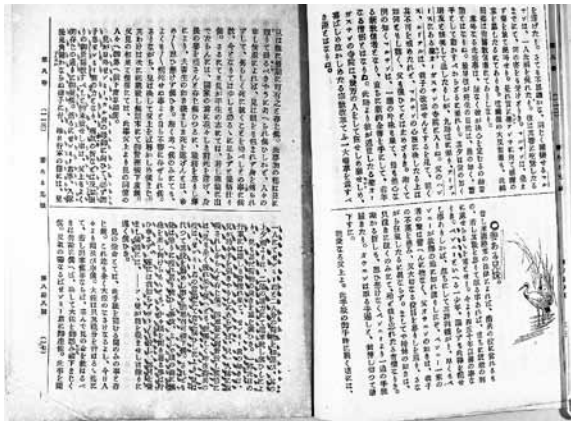
この記事に対する書き入れを見ると、「若し夫れ経済の点を言はん歟…百年の後は蔚然たる森林となりて学校の経費を支ふるに至るべし。豈一挙兩得の美挙にあらずや。」という結論部の付近に、まず鉛筆と思われるもので「教育者ノ世ヲ利スル又大ナラズヤ。」とあり、これに続けて上で見てきたものと同じ朱で「豈畜世ヲ利スルノミナラズ。」とある。さらに鉛筆と思われる字で、文末には「大賛成園主ノ注目感ズルニ余

リアリ.]との書き入れがなされている。

回し読みなどによって複数の人物が書き入れたものか、あるいは同じ読者が繰り返し書いたものだろうか。筆跡からは後者のように推測されるが、そうだとすれば、この読者は1度読んだきり、という読み方ではなく、雑誌を繰り返し読み、異なる筆記具でその都度感想を書き入れたことになる。そのような読み方は、感想からもうかがえる通り、『少年園』の記者（「園主」）の思想に共鳴していたからこそなされたものだろう。

このような共感的な書き入れは、論説だけでなく読み物に対してもなされていた。

【史料4-1】「誉ある兄妹」『少年園』8巻88号（1892年6月3日）



所蔵：国文学研究資料館

居眠りをしたために銃殺されることになっていた少年兵だが、実は身体の弱い友人のために倍以上働いたことに原因があり、少年兵の妹がリンカーン大統領のもとへ兄の無罪を直訴しに行くという話である。これはリンカーンにまつわるエピソードとしてよく知られ、日本へはアメリカの教科書を通して伝えられたものであった¹⁶。

まずタイトルには鉛筆で二重線が、タイトルの冒頭には朱で○が付されている。また、「ベンニー」「ブロッズム」という兄妹の名前には朱で傍点が付され、兄が父へ宛てた手紙の一部にも朱で傍点が付されている。それは居眠りをした理由についてつづられた部分で、身体の弱い友人のために倍働いたためにつうとうとしてしまったという箇所であった。

【史料4-2】同上



所蔵：国文学研究資料館

さらに文末の「いとめでたし」には鉛筆で傍点が付され、末尾には「思ハズ涙潜然トシテ降ル。」との感想が書き入れられている。

ここでもやはり2種類以上の筆記具が用いられており、1人が複数回読んだ、あるいは2人以上が回覧したような読み方がみとれるとともに、物語によって涙したことが綴られている。

最後に、もうひとつ論説の書き入れについてみておきたい。

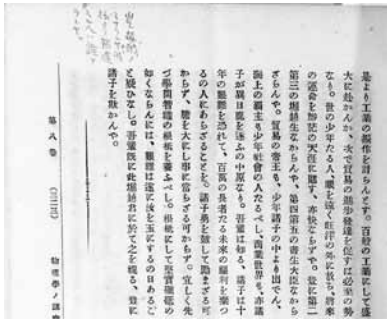
【史料5-1】「商業学校より大臣出でぬ」『少年園』8巻95号（1892年10月3日）



所蔵：国文学研究資料館

これも巻頭の社説である。商業学校を卒業した「堀越善十郎」という人物が単身渡米し、当初は苦労したがメーソン商会へ入社、羽二重絹織物の輸入で利益を上げたことによって重用され、遂には当時の大臣と同じ給料を得るまでになったという立身出世譚である。

【史料 5-2】 同上



所蔵：国文学研究資料館

タイトルには青で波線が引かれている。末尾には、上部に鉛筆で「豈堀越ノミナランヤ。我校ヨリ超進(精進の意味か一筆者注)スル人ハ誰ナランヤ。」と書き入れられている。

堀越善重郎は、森有礼が1875年に設立した商法講習所で学び、1884年に渡米、記事の通りメーソン商会で活躍した後は堀越商会を設立した著名な実業家である。記事は、当時日本唯一の官立商業学校であった東京高等商業学校の校長矢野二郎が卒業生の出世を語った内容がもとになっており、商工業などの実業によろやく世間の関心が向き、堀越のような成功者が出たことを喜ぶとともに、10年の艱難を厭わず未来の成功を目指せと少年たちを鼓舞するものである。

この書き入れは、こうした記者の主張に共感を示すとともに、「我校」からも堀越のような成功者が出ることを期待し、鼓舞する内容である。

以上でみてきた例は、その筆跡や内容から、おそらく同じ読者によるものかと思われる。傍線や傍点の箇所などをみると、教訓性の強いもの、中でも特に立身出世に関する記事に強い関心を示していたようである。

批評は、記事の内容を自分なりに解釈し見解を加えるような書き方がされており、ある程度の教養を身に付けた人物であったことが想起される。先述の「我校」という書き方や、他にも女学生の墮落に関する記事に「慨嘆」と書き入れられている様子¹⁷からは、高等小学校や中学校に通っていた生徒というよりは、教員など、もう少し年齢の高い層に属する人物かとも思われる。『少年園』は主幹の山縣悌三郎がもともと教育関係者であったことから、教師にも一定数以上の読者が存在

したことが知られている¹⁸。

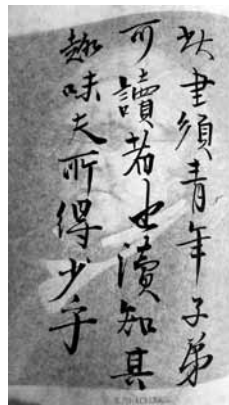
もしもこれが教師による書き入れであり、生徒に読ませる前にこのような書き入れがなされていたとしたら、この書き入れによって新たな解釈と価値が付与され、生徒の読み方を誘導する効果をもったのではないだろうか。教師と生徒という上下関係のもとに提示されたものだとすれば、雑誌や記事に対するある種の権威づけがなされたことになる。

いずれにせよ、この読者の批評はすべて雑誌に対し好意的・共感的であり、複数の種類の筆記具を用いている様子からも雑誌を繰り返し読むという愛読ぶりがかがえる。

ここまでは国文学研究資料館所蔵の『少年園』から書き入れを見てきたが、別の所蔵館の書き入れについても見ておきたい。次の史料は大阪府立中央図書館国際児童文学館所蔵の『少年園』である。

(4) 雑誌の評価に関する書き入れ

【史料 6】『少年園』4巻 37号 (1890年 5月 3日)



所蔵：大阪府立中央図書館国際児童文学館

口絵前の遊び紙に筆で書かれたもので、「此書須青年子弟可読若也讀知其趣味夫所得少乎」と読める¹⁹。つまり、『少年園』は青年子弟みなが読むべきもので、読むことで得るものは大きいと、『少年園』を読むことを推奨している。

ここまでみてきたそれぞれの記事に対する批評ではなく、雑誌そのものに対する評価とみたほうがよいだろう。「青年子弟」という書きぶりからは、年長者の書き入れかとも思われる。こうした書き入れが最初の読者によってなされることで、新たな価値をもって次

の読者へ手渡された様子がうかがえる。

一方で、次の例もまた同じく筆で大きく書き入れられたものであるが、史料6とはやや異なる様相を示している。

【史料7】『少年園』5巻56号（1891年2月18日）



所蔵：東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫

これもまた、『少年園』という雑誌に対する評価である。「少年園ハ余ガ師ナリ 少年園ハ余ガ父母ナリ」と裏表紙に筆で書きつけている様子からは、別の読者へ向けてというよりは、この雑誌を師と仰ぎ父母として慕うことで自分を鼓舞し、己を律することを目的とした字句のようにもみえる。この読者の場合にも、やはり雑誌に対する絶大な信頼や愛着のほどがうかがえる。

こうした書き入れは、『少年園』の記者のもとに届くことはなく、それによって自分の名前が誌面に掲載されるという栄誉が得られることもない。それにも関わらず残されたこれらの遺墨は、『少年園』がいかに熱烈に支持されていたかを示している。

『少年園』は著名人による論説を中心にした新しい体裁の雑誌として創刊され、そのあといくつもの後続の少年雑誌を生んだ先駆的な雑誌であった²⁰。『少年園』に残された読書の跡からは、青少年の読書に対する欲求と、『少年園』に対する期待のほどが伝わってくる。

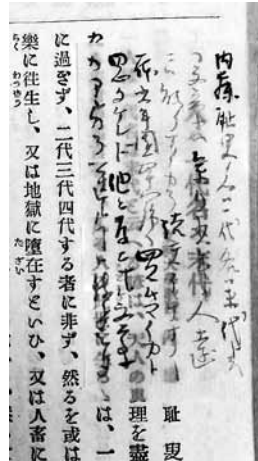
しかし、書き入れにはこのような好意的なものばかりではなく、時に批判的な読み方がなされることもあった。章を改めてみていくこととする。

3 批判的に読むということ

(1) ある論説をめぐる

まずひとつめにみていくのは、大阪府立中央図書館国際児童文学館所蔵の『少年園』で、本体そのものに対する書き入れではなく、間に挿入された紙である。

【史料8-1】「人ハ一代名ハ末代」『少年園』4巻48号（1890年10月18日）



所蔵：大阪府立中央図書館国際児童文学館

一部判読不明な箇所もあるが、活字に起こしてみると以下の通りである（／は改行箇所を示す）。

内藤耻叟ノ人ハ一代名ハ末代ト云フ文章ハ余リ少年人達ニハ能クナイカラ読テハイケナイノ一少年園四十八號ハ買ム（フの誤字か一筆者注）マイカトノ思タケレド他ニ為ニナル文章ノカアルカラ送ル（コト一筆者注）ト致シマシタ

内容としては、巻頭文である内藤耻叟の「人ハ一代名ハ末代」という文章はあまり少年たちによくないのでこの論説が掲載された48号は買わないでおこうかとも思ったが、他に為になる文章が掲載されているので送ります、というものである。

復刻版のものと比べると明らかなように、読むべきではないとされた論説の題名を隠すような形で紙が添付されている。

【史料 8-2】『少年園』復刻版（不二出版，1988年）



【史料 8-3】「人ハ一代名ハ末代」『少年園』4巻48号



所蔵：大阪府立中央図書館国際児童文学館

この号は紙幅の都合から巻頭論説を省き、歴史学者の内藤耻叟による寄稿が最初の頁になっている。

論説の内容はどんな人物も人間は一代で滅んでしまうからこそ、名を遺す必要があるとした上で、日本史上に名を遺した偉人の例から、その方法を藤原鎌足のような「立功」、菅原道真のような「立德」、あるいは水戸光圀のような「立言」の3種類に分類し、この論説を読む少年諸君も励むべし、というものであった。一見するとよくある教訓話のように思えるが、なぜこの論説が問題視されたのだろうか。

それは恐らく、論説の中の「其商工業の賤技を学び、判任等外の微禄を逐ひ、糊口に急にして、立身に緩なる者」という箇所、とりわけ「商工業」を「賤技」とした部分であろう。

先にみた「商業学校から大臣出でぬ」の論説からもわかるように、『少年園』では欧米諸国に対抗するた

めには商工業の発展が不可欠として、その重要性を説いてきた。1884年1月に商業学校通則が公布されたことによって、実業教育はすでに制度化され、先にみた堀越のような成功者を輩出してもいた。

こうした状況を鑑み、『少年園』の編集者はこの論説に対しても、内藤の文章の最後に注をつけ異論を呈している。「先生の文、常に気を以て勝つ、此篇の如き滔々汨汨、降水の汎瀾するが如し」と称賛した上で、「記者大に見る所を先生と異にせざるを得ず、商工業は賊技にあらず」と断じ、「商工業を賤むは東方諸国一大弊なり」と論じている。当時帝大教授という権威ある立場にあった内藤に対して異議を申し立てることは『少年園』の重要な論客を減らす可能性もあった。しかし、そのような危険を冒してでも反論しなければならないと記者は考えたのであろう。

この紙を付した人物は、こうした記者の考えに同調したことから48号の購入を躊躇したものと思われる。これまでみてきた書き入れの場合、当時一般的であった漢文訓読体であったのに対し、ここでは言文一致体が用いられていることも注目し値する。この書き入れは、言文一致体の方に親しみをもつような年少の誰かに『少年園』を送っていたものとも考えられるからである。

自分以外の誰かに送るからこそ、配慮が働いたのだろう。しかし、これを書いた人物は内藤の論説以外の記事の価値を信じて結局送ることにした。よくない論説があるにせよ購入し送ることにしたのは、『少年園』や記者に対する信頼があつてのものだと思われ、その意味ではこの書き入れも、『少年園』を支持する人物によってなされたものであった。

こうした批評に対し、次にみていく例は辛辣ともいえる書き入れである。次の例は、『少年園』に続いて創刊された雑誌『小国民』に対する書き入れである。

(2) 文章をめぐる

『小国民』は、『少年園』の創刊の翌年、1889年に創刊され、『少年園』より低い年齢層を対象とした雑誌であった。この雑誌にも『少年園』と同じく、作家や政治家から論考が寄せられることがあつた。

以下の記事は、幸田露伴による論説である。「問ふ

ことは知ることの始め」として、質問は智慧の母であること、ただみだりに他人に質問をするのではなく、自ら大きな問いを立て、考え続けるとともに、どんな相手にも知らぬことは問う姿勢が重要であることを、偉人の例をひきながら論じたものであった。

【史料9】幸田露伴「問ふことの価値」『小国民』5巻3号（1893年2月1日）

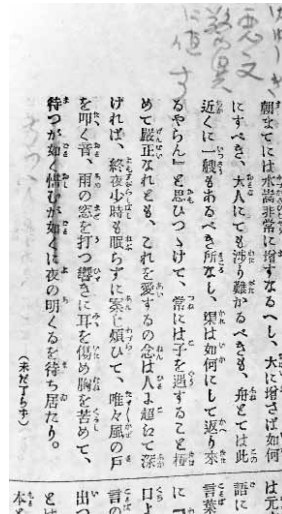


所蔵：大阪府立中央図書館国際児童文学館

この記事に対する書き入れは、これまでみてきたものと異なり、冒頭付近に位置している。鉛筆での書き入れで、「クドぐしく理屈を述べたてるは露伴の癖なり」のあと、字は大きくなって「読むに堪えず」とある。本文は5頁にわたるものであったが、冒頭にこのような書き入れをすることで、この記事にはこれ以上読む価値がないということが示されている。

「クドぐしく理屈を述べたてる」のが幸田露伴の文章の特徴であったのか判断することは容易ではないが、すでに1889年の『風流伝』の成功もあり、当時文壇での露伴の地位は確固たるものになっていた²¹。網羅的な調査を行ったわけではないため想像の域を出ないが、恐らくこうした露伴をはじめとした著名な作家に対する否定的な見解は少年雑誌の投書欄ではあまり展開されなかったのではないだろうか。『小国民』の主要な読者層であった小学生よりも、もっと高い年齢の読者による書き入れかとは思われるが、雑誌本体への書き入れという著者や編集者に見られない場だからこそ見受けられた批判的な意見と考えられる。

【史料10-1】「父の厳命」『小国民』5巻3号



所蔵：大阪府立中央図書館国際児童文学館

同じく『小国民』5巻3号に掲載された「父の厳命」という翻訳調の読み物に対する評価はより辛辣であった。この読み物の最後には「ゆゆしき悪文驚嘆に値す」と書き入れられている。

具体的に何が「悪文」とされたのだろうか。誌面をみると、史料10-2、10-3に見られるように、助動詞や助詞の使い方など、細かく添削している。

例えば冒頭の「今より数年前の事なりしが、北亜米利加のコンネクチカット州にナウガタックといふ河なり、其河畔にビソップといへる一家族住居しけり」という一文は、「今より数年前の事なりき、北亜米利加のコンネクチカット州にナウガタックといふ河^の、其河畔にビソップといへる一家族住居しけり」という風に修正されている。

【史料10-2】同上



所蔵：大阪府立中央図書館国際児童文学館

【史料 10-3】 同上



所蔵：大阪府立中央図書館国際児童文学館

修正箇所は、先にみた「…コネクチカット州にナウガタックといふ河なり」のように、明らかに訂正した方がよいものから、そのままでも文意は通じるものまで様々だが、全体として添削されたものの方がより簡潔で読みやすい表現になっている。「悪文」はまさにこの文章に対して向けられたもので、この読み物の内容に対してというものではなさそうである。

ところで、この読者はなぜここまで丁寧に字句を修正したのだろうか。自分の文章能力の向上のためだったのか、あるいは自分の子や生徒に読ませるに先立っての検閲のようなものだったのだろうか。いずれにしても、当時の少年雑誌が獲得していた読者層は、そのねらいよりも広く、そこに注がれている視線はしばしば厳しいものでもあったといえよう。

4 おわりに

本稿では、国文学研究資料館、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫、大阪府立中央図書館国際児童文学館に所蔵されている少年雑誌について、そこに残された書き入れの具体的な事例を参照しながら、雑誌がどのように読まれたかについて検討してきた。こうした書き入れを用いた調査研究の弱点については先述した通りだが、本稿においても予備調査を行った神奈川近代文学館や茨城大学図書館所蔵分については、明確な読書反応のような記録がほとんどなく、参照できる事例がなかった。また、国文学研究資料館以外の図書館・文庫では、『少年世界』についても予備調査を行ったが、有効なものを拾うことができなかった。

結果として、主な読者対象となっていた尋常・高等

小学校から中学校にかけての少年読者による読書反応というよりもむしろ、彼らにその雑誌を与えてよいかどうかを判断するような、年長者の読書反応の方が書き入れとして多く残されていることが明らかになった。一定以上のリテラシーを身に付けた人物の声を復元することはできても、やはり年少の読者については難しく、この点は少年少女の日記など、異なる史料によって補完していく必要がある。

個々の事例からは、雑誌に対する強い共感だけにとどまらず、時に批判的に、時に辛辣に雑誌を読む読者の姿が浮かび上がった。雑誌の欄外は、編集者に遠慮することなく吐露された感情表現の場でもあったといえるだろう。また、そのような書き入れがなされた雑誌が別の誰かの手に渡ることで、「新しい意味と身分を付与」²²された雑誌へと変化していたのである。

本稿で明らかにできたのは、このような読書実践の一端に過ぎないが、今後こうした書き入れの内容を投稿欄に掲載されたものと比較・対照していくことによって雑誌と読者の実態をより立体的に描いていくことができるだろう。

また、書き入れを行うことが当時どのように考えられていたのかという問題、すなわち読書の方法に関する考察は十分に行うことができなかった。

中野重治の自伝的小説『梨の花』では、主人公が教科書に線を引く様子を見て、同級生が先生に怒られるのではないかと心配する場面がある。主人公はこうした読み方を、前述の竹貫佳水『読書法』から学んだというが、この例からは子どもが教科書に線を引くことは叱責に値する行為だったことが読み取れる。

津野海太郎はこの事例をもとに、手写本や木版本にひそむ精神性が活版印刷の普及によって薄れ、自分が所有する本の紙面を好みや必要性に合わせて加工するような読書法や勉強法がこのころからゆっくりと社会に定着してきたのではないかと考察している²³。

これは明治末期の教科書についての事例だが、果たして雑誌についての読書法は近代においてどのように教えられてきたのだろうか。こうした点についても丁寧に検討していくことで、テキストの内容にとどまらない、より広いスケールで子どもと書物の関係史を描き出すことが可能になるだろう。

謝辞

本稿で扱った史料の解説にあたっては、東北大学文学部助教の河内聡子先生にひとかたならぬご尽力を賜りました。心から御礼申し上げます。

また、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法制史料センター明治新聞雑誌文庫、国文学研究資料館、大阪府立中央図書館国際児童文学館、神奈川近代文学館、茨城大学図書館においては、貴重な史料の閲覧および撮影・掲載に際し格別のご配慮を賜りました。調査にご協力いただいた皆様、日本児童文学学会第55回研究大会において貴重なご意見を賜りました皆様にも、記して感謝申し上げます。

なお、本研究は高梨学術研究助成（平成26年度若手研究）、JSPS 科研費 JP15H06704、平成28年度仁愛大学共同研究費の助成を受けたものです。

引用文献

- 1 今田絵里香『〈少女〉の社会史』勁草書房、2007。
- 2 岩田一正「明治後期における少年の書字文化の展開：『少年世界』の投稿文を中心に」『教育学研究』64（4）、日本教育学会、1997.12、pp.417-426。
- 3 土居安子「『少年世界』（博文館）の読者投稿欄の考察：明治期の読者がみた『少年世界』」『国際児童文学館紀要』21、大阪国際児童文学館、2008.3、pp.1-21、「読書投稿欄から見る明治後期の『少年世界』：創刊時の『少女世界』との比較を通して」『国際児童文学館紀要』24、大阪国際児童文学館、2011.3、pp.15-29など。
- 4 和田敦彦『読書の歴史を問う：書物と読者の近代』笠間書院、2014、pp.33-34。
- 5 田嶋一「少年概念の成立と少年期の出現：雑誌『少年世界』の分析を通して」『國學院雑誌』95（7）、國學院大學、1994.7、pp.1-15では日記を用いた分析が、飯干陽『日本の子どもの読書文化史』あずさ書店、1996および加藤理『駄菓子屋と子どもの読み物の近代』青弓社、2000では回想を用いた分析がそれぞれなされている。
- 6 林哲也「本の読み方をめぐって：線引き書き込みについて考える」『実践女子大学短期大学部紀要』36、実践女子大学短期大学部、2015.3、pp.57-61。
- 7 橋口侯之介『和本入門：千年生きる書物の世界』平凡社、2005、pp.200-204、同『続和本入門：江戸の本屋と本づくり』平凡社、2011、pp.222-223。
- 8 水上雅晴「琉球地方士人漢籍学習の実態：書き入れに着目した考察」『琉球大学教育学部紀要』84、琉球大学教育学部、2014.2、pp.1-12。
- 9 H.J.Jackson, *Marginalia: Readers Writing in Books*. New Haven: Yale UP, 2001, W.H.Sherman, *Used Books: Marking Readers in Renaissance England*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2008, Peter Beal, *A Dictionary of English Manuscript Terminology 1450-2000*. Oxford: Oxford UP, 2008など。
- 10 山田昭廣『シェイクスピア時代の読者と観客』名古屋大学出版会、2013、pp.119-122。
- 11 ウォルター・ウェストン「五月のフジヤマ」山本秀峰編・訳、村野克明訳『富士山に登った外国人：幕末・明治の山旅』露蘭堂、2002、pp.147-158。
- 12 「英人の気象」『読売新聞』5380号、1892.6.29。
- 13 「英人フォルダム氏の漫遊」『朝日新聞』2276号、1892.6.29。
- 14 「神州」は当時の日本の自称で、『少年園』の前後の巻号でも「日本少年、神州男児」という呼びかけが用いられている（「少年社会の大恥辱」『少年園』8（96）、1892.10.18など）。
- 15 詳しくは、岡本貴久子『記念植樹と日本近代：林学者本多静六の思想と事績』思文閣出版、2016を参照。
- 16 明治期には若松賤子による翻訳もあるほか（尾崎るみ「若松賤子と英米児童文学」『キリスト教文学研究』26、日本キリスト教文学会、2009.5、pp.116-128）、戦中・戦後を通して伝えられるエピソードのひとつである（奥山恵「吉野源三郎「リンカーン伝」生成考：戦争をくぐるということ」『児童文学研究』35、日本児童文学学会、2002、pp.21-36）。
- 17 「女学生の風評」『少年園』8（88）、1892.6.3。
- 18 滑川道夫『『少年園』解説・総目次・索引』不二出版、1988。
- 19 2字目が判読不明だが、内容から「書」の略字と判断した。
- 20 木村小舟『少年文学史明治篇』別巻、童話春秋社、1943、pp.82-83。
- 21 幸田露伴と少年文学については、関谷博『幸田露伴の非戦思想：人権・国家・文明（少年文学）を中心に』平凡社、2011を参照。
- 22 ロジェ・シャルチエ著・長谷川輝夫訳『書物の秩序』ちくま学芸文庫、1996。
- 23 津野海太郎『読書と日本人』岩波書店、2016、pp.107-112。

本稿で掲載した画像の二次使用は禁じられています。

